

熊本大教育学部 有富正和

目的 日本の料理にしばしば使用される青ジソは芳香を有すると共に、かなりアクの強い植物である。その揮発油については古くから数多くの研究が行なわれているが、アクの主成分と予想されるフェノール性成分についての報告は見当たらない。いわゆるアクの本質を明らかにする目的で今回青ジソ葉のフェノール成分を研究した。

実験結果 乾燥青ジソ葉の MeOH 抽出物から *n*-BuOH に転溶し、Amberlite XAD-2 に吸着する物質を DCCC にかけて、8 つの区分を得た。DCCC の移動層に難溶の区分と Fr.3 から物質 I,  $C_{21}H_{18}O_{12} \cdot 2H_2O$ , mp 300°C,  $UV\lambda_{max}^{MeOH} nm: 283(4.32), 333(4.43)$ , を, Fr.1 から II,  $C_{27}H_{30}O_{15} \cdot 2H_2O$ , mp 252-253°C,  $[\alpha]_D^{20} +6.8^\circ$  (methanol),  $UV\lambda_{max}^{MeOH} nm: 272(4.26), 330(4.30)$ , を, Frs.5,6,7 から物質 III,  $C_{18}H_{16}O_8$ , mp 172-173°C,  $[\alpha]_D^{20} +88.2^\circ$  (methanol),  $UV\lambda_{max}^{MeOH} nm: 289(infl., 4.10), 329(4.22)$ , および物質 IV, mp 193-196°C,  $UV\lambda_{max}^{MeOH} nm: 292-303(infl., 3.97), 321(4.03)$ , を得た。それぞれの収量は乾燥葉に対し I; 0.01%, II; 0.002%, III; 0.2%, IV; 0.005% であった。化学的方法および UV, IR, PMR ならびに FD mass スペクトルの結果から、これらはそれぞれ I; scutellarin, II; 6,8-di-C-hexosylapigenin, III; rosmarinic acid, IV; caffeic acid と決定された。

結論 rosmarinic acid の水溶液は渋く苦い味を示し、放置すると、特にアルカリ性下、褐変する事実および収量の点から、青ジソのアクの主成分は rosmarinic acid と決定した。rosmarinic acid は青ジソ葉中または少なくとも MeOH 抽出物中塩の形で存在する事が DCCC 上の挙動から推察された。今回の結果および文献から、rosmarinic acid は自然界特にシソ科の植物に広く存在している事が予想された。